反権力のジャーナリスト「宮武　外骨」

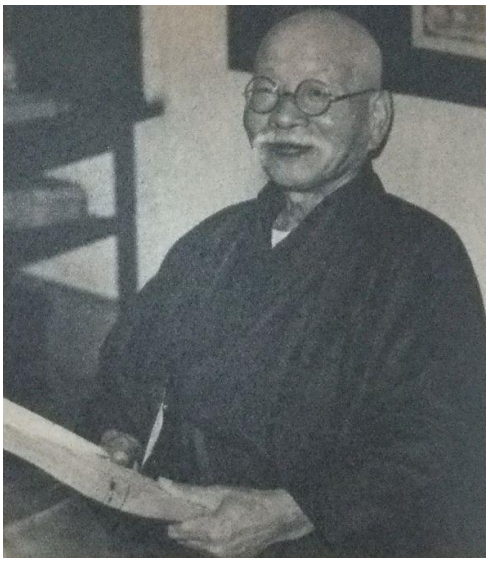
2022/09/22　　気抜けた惰性老人

「宮武 ガイコツ」という人を知っていますか？ 著名な人らしいのですが、…」と同窓のＨさん。「ガイコツ」、なんと凄い名前の方でしょうか。讃岐の生まれとかで私が同郷出身と知った上で訊いてきたのです。しかし、私にその名前の憶えはありません。家に戻り、インターネットで調べてみました。「ガイコツ」は、「外骨」でした。そして、今年の 3 月まで毎週水曜日に放映されていた NHK 番組「歴史秘話ヒストリア」において、２００９年７月に『*さわるな危険！ 宮武外骨 ～反骨の闘士 時代と格闘す～*』で取り上げられもした著名人でした。知らぬは無学な私だけかもしれません。以下は、調べたことの雑文です。

宮武 外骨（1867 年２月 22 日〈慶応３年１月 18 日〉 - 1955 年〈昭和 30 年〉７月 28 日）は、日本のジャーナリスト（新聞記者、編集者）、著作家、新聞史研究家、明治期の世相風俗研究家。

明治・大正期にはジャーナリストとして、政治家や官僚、行政機関、マスメディアを含めた権力の腐敗を言論により追及した。日本における言論の自由の確立を志向し、それを言論によって訴えた。また、活字によるアスキーアートを先駆的に取り入れた文章など、様々な趣向を凝らしたパロディや言葉遊びを執筆した。関東大震災以降は風俗史研究に活動の重点を移し、東京帝国大学（東京大学）に明治新聞雑誌文庫を創設した。

（from Wikipedia 宮武　外骨）



宮武　外骨　（８４歳頃）

高杉晋作や坂本竜馬が亡くなった慶応３年の生まれであり、同年生まれには夏目漱石、正岡子規、南方熊楠（みなかたくまぐす）、幸田露伴等がいます。14 歳の時に讃岐から上京し、17 歳の時に幼名「亀四郎」から「外骨」と改名しました。明治になって戸籍制度が整備されていく過程で、改名が許される時期があったのです。後に、「外骨」はペンネームとよく間違われたために『是本名也』の四字の印鑑までつくり、名前の横に押しています。尚、晩年に「外骨」の読みを「とぼね」に改めています。

骸骨は 18 歳から執筆活動を始め、生涯に 120 以上の雑誌書籍を発行しています（中には短命で１号のみの廃刊誌が実に 17 を数えます）。罰金発禁 29 回、あまりの頓知（猥褻まがい）と反骨（政府揶揄等）により４度の投獄に及ぶという過激な反権力のジャーナリストでした。89 歳（1955 年）、老衰で亡くなるまでに５人の妻を持ちました。墳墓廃止論者でしたが、彼の墓は東京駒込の染井霊園にあります。

骸骨の人生を賭けた活動の中で、「頓知」と「滑稽」は彼の一貫したメソッドだという。21 歳の明治 20 年（1887)、素っ頓狂な「頓智協會雑誌」を創刊したのを皮切りに、29 歳では「頓智と滑稽」を、35 歳では「滑稽新聞」を、42 歳でも「大阪滑稽新聞」を、昭和 2 年（1927）の 61 歳でなお「奇抜と滑稽」を創刊しています。

『滑稽新聞』はあくまでも「滑稽」を旨とした月 2 回発行の雑誌形式の新聞で、モットーは『威武に屈せず富貴に淫せず、ユスリもやらずハッタリもせず、天下独特の肝癪（かんしゃく）を経（たていと）とし色気を緯（よこいと）とす。過激にして愛嬌あり』。特に権力批判を主眼としたものではなかったが、世間の現実すべてを「滑稽」という視点で捉えるうちに権力や権威が本質的に内在する滑稽な姿に行き着いてしまう。力を誇示する者が失墜し狼狽する姿こそが滑稽の極みだということを誌面を通じて読者に見せつけたというのです。最盛期の部数は８万部。この時代の雑誌としてはトップクラスの売れ行きでした。1908 年までの 8 年間にわたる発行期間に、外骨は 2 回入獄、関係者は 3 回の人獄、罰金刑は 13 回、発行停止は４回、発売禁止は３回、警察による営業妨害が１回というすさまじい筆禍を受けました。1908 年の廃刊は、発行禁止命令に先んじた自殺廃刊だったのです。

滑稽新聞の表紙

1904 年（明治 37）２月、日露戦争が勃発します。出版物へのきびしい検閲制度が一層厳重になり、特に日露戦争では報道禁止、発禁、発行されても伏字だらけで国民は何が書かれているのかサッパリわけのわからない状態となりました。これを逆手にとって外骨は次のような伏字だらけの記事でからかったのです（開戦の約一ヵ月後）。

「●秘密外の〇〇」

「今の〇〇軍〇〇事〇当〇〇局〇〇〇者は〇〇〇〇つ〇ま〇ら〇ぬ〇〇事までも秘密〇〇秘密〇〇〇と〇〇〇いう〇〇て〇〇〇新聞に〇〇〇書〇か〇さぬ〇〇事に〇して〇〇おるから〇〇〇〇新聞屋〇〇は〇〇〇〇聴いた〇〇〇事を〇〇〇載せ〇〇〇〇られ〇〇得ず〇〇して〇〇丸々〇〇〇づくし〇の記事なども〇〇〇〇多い〇〇〇
是は〇〇つまり〇〇〇当局者の〇〇〇〇〇尻の〇〇穴の〇〇狭い〇はなしで度胸が〇〇〇無さ〇〇〇過ぎる〇〇〇〇様〇〇〇〇だ　……」
（滑稽新聞第６９号、明治３７年３月２３日付）

〇〇を飛ばして読めばふつうの文章となる洒落（しゃれ）っ気。風刺を武器に権力・権威を笑いのめすに芸がいるのです。いつの時代の権力も都合の悪いことは隠しておきたい。今でも政府に開示請求して出された文書が、しばしば不可解な黒塗りになっています。

外骨は生涯五人の妻を持ち、その間に 16 人のメカケをとりかえたという。外骨 74 歳の時にその最後の妻となる 40 歳も離れた稲田能子（よしこ：当時 35 歳）と結婚したのです。この時のエピソードが傑作なのです。

外骨の友人が妻を亡くし困っているため、かわいそうにと思った外骨は版元の長女・能子をその後添えとして紹介しました。見合いさせるため能子をタクシーに乗せ、見合いの場所まで連れていく途中、
「アイツは華族の出身だから、少々カタイところもあるが・・・」と説明すると、能子は突然「そんなかた苦しい男と一緒になると、苦労する。いっそのこと先生のような話のわかる人の方が・・・」と言いだす始末。

見合いをすませた後で、能子は「やっぱり先生の方がいいわ。先生はどう・・・」と迫ってきたのです。外骨は「年令が 40 歳も離れており、私はいいが、あなたが気の毒だ」と遠慮したのですが、「でも、先生はお元気ですから・・」と逆に言い寄られて、ついに２人は一緒になったというのです。外骨は、最後の妻能子に看取られて昭和 30 年（1955 年）7 月亡くなりました（享年 88 歳外骨）。

骸骨は、真の自由自在な発想力を発揮して生きた反骨のジャーナリスト、奇才・奇人でした。外骨の奇行にはついつい笑ってしまうのですが、その発想力（奇才）、実行力には感心させられます。私は、まだまだ気抜けた惰性の人生を送ってはいけないようだ。

参考文献

Ref.1 日本風狂人伝⑮ 日本一の天才バカボン宮武外骨・「予は危険人物なり（上）は抱腹絶倒の超オモロイ本だよ。｜前坂俊之オフィシャルウェブサイト（maesaka-toshiyuki.com）

Ref.2 日本風狂人伝⑯ 宮武外骨・予は時代の罪人なり（中）超オモロイで、日本最高のジャーナリスト、パロディトだよ、ホント！　｜前坂俊之オフィシャルウェブサイト（maesaka-toshiyuki.com）

Ref.3 日本風狂人伝⑰ 宮武外骨・奇人変人の日本最高傑作だね（下）　｜前坂俊之オフィシャルウェブサイト（maesaka-toshiyuki.com）

Ref.4 【特別寄稿】『滑稽新聞』とはどんな新聞だったのか／吉野孝雄さん

Ref.5 0712 夜　『宮武外骨』　吉野孝雄 － 松岡正剛の千夜千冊（isis.ne.jp）

Ref.6 宮武外骨は「滑稽新聞」に風刺記事・戯作を書き、筆禍事件もある反骨精神の奇人（skawa68.com）

Ref.7 宮武外骨 一円本流行の害毒と其裏面談（aozora.gr.jp）